

2024 年度事業報告

公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)は、2011年に公益財団法人に移行して以来、国内外の「児童及び青少年を対象とした外国語教育及び多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業を行い、もって児童及び青少年の相互理解と人間形成を図り、新たな国際社会の発展に寄与する」(定款第2章第3条)ことを目的として事業を推進してきました。

急速かつ大きく変化し続ける社会構造と、国際情勢や自然環境の中で、「複雑で多様な背景を持ったすべての人がより自由に、より対等に生きられる世界を創り、未来につないでいく」ことをビジョンに掲げ、2024年度も、未来を担う子どもたちが仲間と対話・協働し、自らの可能性を切りひらく自信を育んでいけるような経験と学びの場づくりを進めてまいりました。特に、事業を通して地域との連携を強め、協働で活動を進めていく体制づくりができたこと、また、長年財団が実施してきた事業の持続性とさらなる発展を目指し、活動を継承していくための外部団体設立に全面的な協力をしてきたことは初めての試みとなりました。さらに、どの事業においても、より一層の対面での取り組みに注力してきたことも、2024年度の特徴と言えます。

2024 年度の事業一覧

【公1】我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

1. 学校のソトでうでだめし
 - (1)「その辺のもので生きる」講座
 - (2)聞き書きプロジェクト
2. 地球講座 2024 「The LIVE」、「The CORE」
3. アの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発・提供事業

1. ときめき取材記ウェブサイトの運営
2. イの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

ウ. 多様な言語や文化の背景をもつ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業

1. 多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿(PCAMP)」
 - (1)ひろしま PCAMP2024
 - (2)とやま PCAMP2024
 - (3)とうきょう PCAMP2025
2. ウの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

エ. 広報事業

1. 財団事業等の発信
2. デジタル媒体を使った広報のサポート
3. エの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動

オ. 助成事業

1. 公募助成金プログラム

【公1】

我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業

予算額 114,059,770 円／実績額 103,502,071 円／収支差額 10,557,699 円

内、公益目的事業共通費用(給料手当、福利厚生費、消耗品費、賃借料など)

予算額 85,320,469 円／実績額 75,795,149 円／収支差額 9,525,320 円

ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

【予算額 11,711,440 円／実績額 10,581,698 円／収支差額 1,129,742 円】

事業名	学校のソトでうでだめし (1) 「その辺のもので生きる」講座					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	4,669,300		4,065,801		603,499	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	60,000	参加費	0	参加費	△60,000
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
	寄付金	0	寄付金	30,000	寄付金	30,000
差額発生 の事由	<p>【経費】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初、鹿児島・東京以外に関西地域での講座実施を想定していたが、鹿児島県日置市でのプログラムの充実に注力したため実施しなかった。その分の講師・スタッフの旅費交通費、謝金が発生しなかった。 ・鹿児島県日置市でのプログラムは会場の地区公民館を無償で使用させてもらったため(減免)、その分の会場費が発生しなかった。 <p>【収益】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より多くの小中高校生に参加してもらうため、参加費の徴収を行わなかった。 ・モリトクラシト・メカニクスに対して、日置市の吹上ライオンズクラブより寄付を受けた。 					
2024 年度の事業						
<事業の目的>						
子どもたちが生きるこれからの時代は、少子高齢化、国際情勢の不安定化、生成 AI の発展、気候変動による環境変化と災害の多発などにより、社会システムが激しく変化し続けると予測されている。変化の激しい時代を生きていく子どもたちが、「多様な生き方や価値観が尊重され、人びとの対等性が重視される社会」の担い手として、希望をもって生きていくための強い支えとなるような経験と学びの場をつくる。						

<2024 年度の目標>

子どもたちがこれから直面する社会の継続的な変動、格差や環境、資源などの問題とそれによって引き起こされ得る分断や争いについて、「ことばによる教え」のみで解決しようとするのではなく、問題の構造を捉え、仕組みに働きかけることで根本的な解決策を見出そうと考えられた技術を身につけながら、その背景にある視座に触れる場をつくる。

技術を習得するプロセスを通して、目の前の事象をつぶさに観察し仮説をたて試すことを繰り返す探究的なあり方、領域で隔てずに包括的に学ぶあり方、ものごとの連鎖や複雑で多様な有り様への視座、既存の枠組みをクリティカルに見つめてものごとの本質を見極める力、自分自身のニーズや考えをより解像度高く捉えてことばで表現する力、対等性への感度などを身につけていくことをめざす。

自分と周囲の問題を自分で解決する技術を増やしていくことは、他者に問題を押しつけたり、他者から奪う構造から離れていく一方、既存の枠組みに捉われずに自分の望む生き方を選びとる自由を手に入れていくことにもつながる。また、扱える技術が増えると自分自身への確かな信頼が生まれ、自分で自分を承認する力、エンパワメントにもつながる。

さらに、技術を習得する過程で、学校で習う知識を、試験のために記憶するものとしてではなく、現実の暮らしや社会に応用されており、自分の生活や人生を助け、豊かにしてくれるリアリティを伴ったものとして学び直し、生涯役立つ知恵へと変換する。

<実施内容>

1. 鹿児島県日置市を中心とした展開

(1) 地区公民館を拠点に「モリトクラシト・メカニクス」シリーズをスタート

地域で身近に手に入る草木や竹や石などの素材を工具を使って加工することで新たな「道具」を作り出し、その過程で上記「目標」に掲げた学びと経験が生成されることをめざした講座を、日置市南部にある吹上地区の公民館を拠点に計 6 回実施した。

初回の「東南アジアの楽器『竹のコリトン』を作ろう」と 2024 年度最終回(第 6 回)の「竹編みを覚えて大きなドームを作る」では、竹という素材にフォーカスした。全国各地で放置竹林が問題となっているが、その背景には、過疎化や人口減少による労働力不足、中国他からの安価な竹素材の輸入などの問題があり、土砂災害や生物多様性の低下を招いている。鹿児島県でも放置竹林は深刻な問題となっている。

初回では、竹は、その皮を薄く剥がすと弦になり、優しい響きのするコリトンという楽器を作れることを経験した。また、コリトンという楽器が国単位ではなくオーストロネシア語圏という共通の言語ルーツをもつ地域に広がっていること、音は空気の振動で起きること・振動の数(周波数/ヘルツ)で音階が決まることなどにも目を向けた。竹や木の加工に不可欠である刃物は、危険だからと遠ざけられ、触ったことのない子どもも多い。コリトン回では、子どもたちが学校で使う平刀や丸刀などの彫刻刀から徐々に刃物に馴染んでいくことを意識した。コリトン作りを選んだのは、その製作過程にホゾやミゾを切る大工の技術が使われることも理由のひとつである。竹を剥ぐ作業では、竹の繊維の特性を知識と感覚の両方で学ぶこともできる。竹から楽器を作る経験を通して、竹や木という素材を加工していくうえでさまざまな応用できる技術やものの見方に触れる回となった。

木をナイフで削り置き炭で穴をあけてスプーンを作ったり、草を編んで草履を作る活動などを経て迎えた第 6 回では、竹編みの技術を応用した竹ドーム作りを行った。竹をノコギリやナタ、竹割り機などの道具で大小のヒ

ゴに変えることができること、ヒゴが取れれば編んでかごやざるなどの道具を作り出せること、かごやざるなどの竹編みの技術を応用すれば人が入れる大きさの構造物にまで発展させられることを体験した。また、編むことで作り出される三角形という形状が構造物に強度をもたせる機能があることを体感し、普段目にする建造物にも三角形が多用されていることに視野を広げた。さらにこの回から、地域の方達が竹林を無償で提供して下さることになり、竹林を会場として、その場で採った竹を使って竹割りの作業や竹ドーム作りを行うことが実現した。これにより、材料の入手から加工、製作までのプロセスをすべてつなげて見る・経験することが可能となった。

(2) 市立中学校で授業を実施

日置市立伊集院北中学校 2 年生 3 クラス 108 人を対象に、「鉄板を金切りバサミで切り、叩いて丸めて鈴を作る」授業と、「廃プラスチックを熱して溶かしてアクセサリーを作る」授業を行なった。いずれも、2023 年度より学校側の要請を受けて打ち合わせを行い、技術の授業の一環として実現した。

前者では、硬い鉄を金切りバサミで切る経験のほか、鉄の展性(圧力や打撃を加えることで伸びる性質)を利用して道具を作る方法を体験した。後者では、プラスチックには様々な種類と特徴があることを学んだ後、実際に毒性の低いポリプロピレン*を熱してアクセサリーに作りかえ、熱することで何度でも再利用できるプラスチックの特性(可塑性)を学んだ。また、SDGs の学習などでプラスチック再利用が人気だが、プラスチックを使う限りマイクロプラスチックの発生を避けられず、根本的な解決にはつながらないという構造にも視座を向けた。

*ペットボトルキャップ(ポリプロピレン)を細かく砕いたものを使用

2. 日置市以外での事業

(1) 桐朋小学校(東京都調布市)での授業

5 年生 2 クラスを対象に「火起こし」の授業を行ない、火が起きる仕組み、熱のふるまい、身体の使い方などを考察した。同校での授業は 2023 年度から継続実施中で、学校側が教科の学習のなかに位置づけ、事前・事後学習とつなげる流れができています。また、2023 年度の授業に参加した子どもたち(6 年生)が発起人となり、2024 年 8 月に鹿児島県日置市吹上町の里山と川を会場にテンダー氏を講師とする合宿の実現へと発展した(桐朋小の児童・保護者・教員有志による自主開催)。

(2) 教育関係者向けレクチャー&ワークショップの開催(東京)

教育関係者をおもな対象に、「大地は教室 - 『考えない』を作らない、竹・草・土・石から始める環結する学びの世界」を開催し、「その辺のもので生きる」講座とモリトクラシト・メカニクスの講師を務めてきたテンダー氏に、この数年の取り組みで見えてきた知見についてご講演いただいた。講演では、教育活動で扱う材料を、その入手から加工・使用、使用後の処理までの一連を通して自分たちで扱える・見ることができるものにする事で、「この部分はあなたは考えなくていい」という思考のブラックボックス(思考停止の肯定)を無意識に共有し、何らかの破綻や綻びを生んだりすることがないようにする学びのあり方*等について提起があった。その後、竹を素材にドーム作りを体験するワークショップを行った。なお、会場は、これまで授業を実施しているご縁から桐朋小学校に無償提供していただいた。

*たとえば、プラスチック製の朝顔キットを使うと、そのキットは子どもたちの目の前に突然登場することになり、どのような素材からどのような工程で作られたものなのかわからない。とりあえずキットが目の前に置かれたところからスタートする。支柱はその辺の木の枝や竹でも十分用をなすが、それについて自分で考えたり、探すプロセスは省かれる。使用後のキット(プラごみ)の行く

末についても自分ごとにはなりにくい。一方、材料を、校庭で育てた木や竹に変えると、自分が使うものがどこから来たのか明白になり、材料の入手や加工を自分の手で行うこともできる。使用後は土に還るのでゴミの問題も生まれない。一連のプロセスのどこかに、「ここで何か問題が生まれるかもしれないということ、わたしもあなたも考えたり、引き受けたりしなくていい」という思考のブラックボックスが無意識に共有されていくことを避けられる。

<成果>

・日置市の地域公民館での定期的なプログラム実施は、TJF のことがほぼ知られていない地域でのゼロベースからの開拓であったが、徐々に認知度と評価が高まり、第 3 回頃より告知から 1 週間ほどで定員に達して締め切るという状況が続いている。保護者からは、「子どもがまた行きたいというので申し込んだ」「学校で学んだことを体験を通して習得するという内容に興味をもった」「自ら必要な物を作り出せたら、生きる力につながるのではないかと思った」「家に帰ってからも講座で学んだことを実践している。参加して終わりでなく、生活のなかで続いている」等の感想が寄せられている。これらの感想や講座での直接のやりとりから、子どもたちの多くが自発的な動機で参加していると推測している。また、保護者が、子どもたちが時代に翻弄されずにたくましく生きていくための技術・ものの見方を受け渡していこうとしていることについて共感し、評価していることが窺い知れる。

・回を追うごとに行政や学校、地域コミュニティとのネットワークが形成されてきて、さまざまなレベルのサポートを得ることができるようになりつつある。例えば、日置市教育委員会が市内の小中高校の全児童・生徒に告知のチラシを配布したり、地域の自治会・商店の方達がチラシを配布・設置するだけでなくプログラムの進展具合を気にかけてくれたり、見学に来たりなど。また、地元ライオンズクラブから協賛の申し出があったほか、第 6 回の竹ドーム回からは自治会の協力で竹林を無償で使用させてもらえるようになった。

・TJF の日置市での活動をふまえて日置市から提案があり、2025 年 2 月に「本質的・探究的・体験的な学びを通した生涯学習の推進に関する包括連携協定」を締結することとなった。2025 年度はその初年度として、日置市の公共施設、学校での活動を重点的に展開する。

・2025 年度に向けて、日置市内の高校や教員グループ、教育機関などから講座の要請があった。

<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)>

2024 年度の活動を通して日置市での事業の認知度を高めるフェーズは概ね達成したと判断し、2025 年度はプログラムのより一層の充実をはかる。具体的には、これまで実施してきた「モリトクラシト・メカニクス」シリーズ(モリメカ)を外部講師も招きつつ年 6 回程度開催する一方、新たに、地域の子どもたちが好きな時間に好きなだけモリメカで扱う技術を練習できる「モリメカ練習会」を月に 1 回実施する。自分のペースでモリメカの技術を練習して習得する場であるほかに、地域の子どもたちの家庭・学校以外の居場所の一つとなり、地域の大人たちもゆるやかに関わられる場となっていくことをめざす。また、モリメカの趣旨を共有し講師として活動できる協力者(後継者)を増やす試みも行なっていく。

事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)

●モリトクラシト・メカニクス

対象:鹿児島県日置市ほかの小中高校生

講師・企画広報協力:テンダー氏(一般社団法人その辺のもので生きる代表理事)

延べ参加者数:191 名(小中高校生およびその保護者。但し保護者の参加は第 2 ～4 回のみ)

会場:日置市伊作地区公民館および公民館裏の竹林(竹林は第6回のみ)

参加費:なし

主催:TJF 後援:日置市教育委員会(第3回以降)

協賛:ライオンズクラブ国際協会 337D 地区 3Z 吹上ライオンズクラブ(第3回以降)

協力:日置市伊作地区公民館(全回)

第1回 東南アジアの楽器「竹のコリトン」を作ろう

実施日:2024年8月19日

参加者数:小中高校生21名

第2回 手と木の棒で火を起こす

実施日:2024年9月28日

参加者数:小中高校生20名、保護者11名 合計31名

第3回 草から縄をなつてアシナカ草履を編む

実施日:2024年10月20日

参加者数:小中高校生19名、保護者10名 合計29名

第4回 焚き火の炭で木を彫ってスプーンを作る ― チャコールディギング

実施日:2024年12月8日

参加者数:小中高校生29名、保護者14名 合計43名

第5回 人類はまだ鉄器時代! 鉄板を叩いて丸めて鈴を作る

実施日:2025年2月24日

参加者数:小中高校生33名

第6回 竹編みを覚えて大きなドームを作る

実施日:2025年3月30日

参加者数:小中高校生34名

●授業

講師・企画広報協力:テンダー氏(一般社団法人その辺のもので生きる代表理事)

(1)日置市立伊集院北中学校(技術科の授業として実施)

対象・参加者数:2年生3クラス108名

・第1回「金属加工:鉄板から鈴を作る」

実施日:2024年10月1日

・第2回「プラスチック再利用(プレシヤス・プラスチック)」

実施日:2024年12月4日

(2)桐朋小学校での火起こしの授業

対象・参加者数:5年生2クラス 72名

実施日:2025年1月17日

●教育関係者向けレクチャー&ワークショップ

大地は教室 - 「考えない」を作らない、竹・草・土・石から始める環結する学びの世界

対象・参加者数:教育関係者 28人

講師・企画広報協力:テンドー氏(一般社団法人その辺のもので生きる代表理事)

実施日:2025年1月19日

会場:桐朋小学校(東京都調布市)

事業名	学校のソトでうでだめし (2) 聞き書きプロジェクト					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	778,200		1,216,601		△438,401	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額発生 の事由	<ul style="list-style-type: none"> ・岩手県紫波町図書館主催「公開聞き書き」(聞き手・塩野米松氏)への参加、会場となるふきあげ図書館関係者との事前会合など準備のための出張をはじめ日置市各町の町史等の関連資料の購入により支出が増えた。 ・当初予定していなかったチラシとポスターを作成した(チラシは日置市内図書館による配付、ポスターは図書館や学校での掲示で使用)。 					
2024年度の事業						
＜事業の目的＞						
「聞き書き」の手法を用いたインタビュー活動を行うことで、相手のことばを受け止め、自分と異なる意見や考えをとおして、自分と向き合い、自分の考えを明らかにし、新たな考えにたどりつくこと、さらに人に伝わる表現方法を考え探ることを目的とする。						
＜2024年度の目標＞						
「その辺のもので生きる」プログラム実施を通して、行政とのネットワークが緒についてきた鹿児島県日置市で、中高生を対象とする「聞き書き」プログラムを新たに実施するために、まず「聞き書き」の意義を理解してもらうことを2024年度の大きな目標とする。そのために、中高校の教師や図書館関係者、地元市民の方々等を対象に、聞き書きの名手といわれる聞き書き作家の塩野米松氏による講演や公開インタビューを行う。公開インタビューでは、日置市内に在住するさまざまな職業の方たちに話し手となってもらい塩野氏が話を引き出すことで、聞き書きへの理解を深めてもらうだけでなく、地域に暮らす人びとを通して地元の魅力を再認識してもらうこともねらいとする。						

<p><実施内容></p> <p>(1)「ひおき再発見～聞き書き作家・塩野米松氏が仕事と暮らしを聞く」実施 日置市ふきあげ図書館の協力を得て、同図書館を会場にして、「ひおき再発見～聞き書き作家・塩野米松氏が仕事と暮らしを聞く」を以下の構成で実施した。 第1部:高校生を対象に毎年開催されている「聞き書き甲子園」のドキュメンタリー映画の上映 第2部:塩野氏の講演、塩野氏による日置市在住の3名の方への公開インタビュー</p> <p>(2)日置市中学国語教員研究会に協力 「聞き書き」をテーマにした研修に塩野米松氏を派遣し、講義とワークショップを行った。</p>
<p><成果></p> <p>参加した方々からは、塩野さんの豊富な知識から出てくる質問と話術に驚き、何よりも日置市に魅力あふれる方々がいらっしやることに感動したという声が多くあがった。また自分も聞き書きに挑戦してみたい、中高生にさせたいといった声も多く、「聞き書き」を知ってもらおうとともに、理解も深まった。</p>
<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)></p> <p>聞き書きは、話し手の人物像を浮かび上がらせるために、その人の生活や仕事について具体的に突っ込んでいくことから、プライバシーに踏み込むことになるケースが多い。通常は非公開の場で行われ、原稿にする際には話し手のチェックも経るが、今回は公開インタビューだったために、プライバシーがそのまま公開されることになった。こうした場で話し手のプライバシーをどう守るかについては大きな課題として残った。 2024年度は当初の目標としていた「聞き書き」への理解は深まったが、中高生を対象とする聞き書きプログラムを実施するためには、地域の機関が主体となりTJFがサポートしていく体制が必要だが、その体制がつけられなかった。</p>
<p>事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)</p> <p>(1)「ひおき再発見～聞き書き作家・塩野米松氏が仕事と暮らしを聞く」 対象:日置市内外の「聞き書き」に興味のある方 実施日:2024年10月6日(日) 場所:鹿児島県日置市立ふきあげ図書館 講師:塩野米松氏(作家) 話し手:佐々祐一氏(漁師)、徳田正人氏(陶工)、前田ゆりえ氏(和菓子職人) 参加者数:35名 参加費:無料 主催:TJF 後援:日置市教育委員会 協力:日置市図書館</p> <p>(2)南薩地区中学国語研究会 対象:南薩地区中学国語教員 実施日:2024年7月30日(火) 講師:塩野米松氏 参加者数:中学国語教員12名. 参加費:無料 協力:TJF</p>

事業名	地球講座 2024 「The LIVE」、「The CORE」					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	4,511,940		4,144,733		367,207	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
	謝金	0	謝金	41,100	謝金	41,100
差額発生 の事由	プログラムの企画を他団体の協力のもと実施してきたが、これまでの知見を継承し、外部専門家にも携わって頂きながら、TJF が主企画者とする事で、委託費を抑えることができた。また、撮影配信支援を Zoom サポート業務に限定するなどして経費を削減することができた。収益については、品川区と清泉女子大学地球市民学科が共催して実施する地球市民セミナーに登壇した講演に対する謝金が臨時収入となった。					
2024 年度の事業						
＜事業の目的＞						
<p>現代社会が抱える課題はますます複雑化しており、特定の地域に暮らす人々や一部の関心層のみで解決できるものではなくなっている。そうした中で、国や地域の枠を超えて連帯するためには、グローバルな視野に立って物事を捉える姿勢がこれまで以上に求められている。</p> <p>本事業では、デジタル地球儀を活用した専門家の講義により、「グローバル」に対する理解を深めることを目指した。その上で、参加者が平和に共生する社会実現に向けて地球を共通のテーマとして対話を重ね、互いの文脈を紡ぎあうことによって、新たなつながりを生み出すことを目的とした。</p>						
＜2024 年度の目標＞						
<p>近年、地球規模の課題に対して国や地域を越えて連帯するどころか、国際機関や合意からの離脱、また政治・経済・情報・教育格差といった要因による分断が顕在化している。こうした状況に対し、2024 年度の地球講座では、多様な他者と関係を築く際に両者の間にみられる発想や解釈などの「違い」に焦点を当てることを目標とした。</p> <p>いわゆる従来の国際交流プログラムでは、言語を媒介とした意味の交換が中心であり、その過程で互いがもつ「違い」は関係構築を妨げる要因として扱われることがあった。一方で、「違い」こそ学びの出発点であり、時間をかけて向き合う価値のあるものでもあった。</p> <p>そこで 2024 年度は、地球をテーマとしつつ、色や形など比較的自由に受け止め合える「イメージ」の連想を通じたやりとりから交流を始めた。そして、「違い」を重ね合わせ連想したイメージを出発点とする対話へと発展させることで、参加者同士が新たな文脈を紡ぐことを目指した。</p>						

<実施内容>

地球講座の中核をなす 2 つのプログラム「The LIVE」と「The CORE」に加え、3 年間の実施を踏まえた振り返りと今後の展望を共有する新たなビジョンの策定を実施した。

地球講座 The LIVE (オンライン&オフライン)

本プログラムは、日本国内在住の中高生を対象に、東京会場にて開催した。オンライン会議システム(Zoom)を活用し、世界各都市のレポーター(日本語学習者)と接続。各地の天候や日の入りの様子などの報告を専門家の解説とともに受け取り、ローカルな出来事をグローバルな視点で捉えなおした。

その結果、各地域の出来事が参加者一人ひとりにとって「自分ごと」として立ち現れるようになった。たとえば、ソウルや北京での大雨被害が地球温暖化による海水温上昇の影響であると知ったことで、地域を超えた課題の共有が促され、地球という同じ惑星に生きる存在として未来を構想する姿勢が芽生えた。参加者はチームで共創した「未来の地球ーこんな地球にしてみたい」をプログラムの最後に発表した。

地球講座 The CORE(オンライン)

本プログラムは、日本(東京、広島、大分)をはじめ、韓国(京畿道、慶尚北道)、中国(上海、北京)、フィリピン(マニラ)、マレーシア(サラワク州)の 9 都市から計 15 名の中高生が参加し、Zoom を会場として 3 日間にわたる交流を行った。テーマは「地球、希望、未来」であった。

1 日目は、「自身が希望する未来」を色やことばで自由に表現し、共有する時間を持った。加えて、プログラムの世界観を説明する目的で、ナビゲーターの高梨氏と TJF スタッフの中野が人の視点と地球の視点では物事の見え方がまるで違うことを、例を交えながら紹介した。

2 日目は、グループに分かれ、参加者によって表現されたことばを組み合わせて新たな連想を引き出した。活動は、各グループのサポーター(過去のプログラム参加者)を中心に学生逐次通訳者の力も借りながら、地球をテーマに「私たちの希望する未来」について構想を深めた。

3 日目は、チームで対話を重ねながら、また講師との対話を交えて、最終的に「私たちの地球の希望未来像」を発表・共有した。

参加者たちは「違い」を出発点とする連想の過程から、創造的かつ論理的に対話を進めることで、チーム独自の文脈を創った。

振り返りと新しいビジョンの策定

地球講座の開始から 3 年が経過したことを機に、これまでの取り組みを振り返り、次なる展開を構想するため、青山学院大学特任教授・鵜川洋明氏をファシリテーターに迎え VISIONING を実施した。

この対話を通じて導き出された今後の事業ビジョンは以下の 2 点である。

- (1) 枠組みを自由に行き来しながら異なる他者と関係を構築し、平和に共生する社会を実現すること
- (2) 多様性を相互に尊重し合いながら、日常と地続きの「ちょっと良い未来(可能性の物語)」を紡ぎ、新たな文化を共創すること

本対話により、本事業における「地球」というテーマは、科学的な対象としての地球にとどまらず、「世界の見方の枠組みを変える」切り口のメタファーとして機能していたことにも気づかされた。

<成果>

本年度の取り組みを通じて、「地球」というテーマが誰一人取り残さず、地域や文化の違いを超えて対等な立場での交流を可能にすることを再認識した。

また、多様な他者との関係構築においては、意味理解を前提とする対話だけでなく、「尊重」を出発点とした創造的なやりとりにより、新たな可能性が見出された。

さらに、振り返りを通じて、「地球」というテーマが、科学的理解を深めるだけでなく、既存の認識枠組みを問い直し、物事を捉えなおす契機としても機能していたことが明確となった。

<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)>

当初、地球講座は「グローバルに対する理解を深めること」を目的として、地球に関する科学的知識を共有する講座型プログラムとして設計されていた。「同じ」を感じ、わかちあうプログラムだった。

しかし、コロナ禍を経て、世界が直面した分断の現実を受けて、事業の目標も大きく転換を求められた。現在は「違い」を感じ取り、分かち合い、さらには新しいものを創り出すことにワクワクできるような交流型プログラムへの移行が求められている。

今後は、以下の点に注力して改善を図る。

- ・自然な交流を促すために、事前に感覚を共有できるようなプロセスの設計
- ・違いを尊重した創造的なやりとりと、それに意味付けをするような対話

これらの取り組みを通じて、多様性の価値をより多くの青少年に届けられるような「場」づくりを、今後も継続的に推進する。

事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)

(1)地球講座 The LIVE 事業概要

対象:国内の中高生

講師:竹村眞一氏(特定非営利活動法人 ELP(Earth Literacy Program)代表、京都芸術大学教授)

実施日:2024年6月22日(土)16:30-20:00

参加者:7名(東京の高校生/5名、神奈川の高校生/1名、埼玉の高校生/1名)

報告者:6名(東京の高校生、マニラの中学生、ソウルの高校生、上海の高校生、クアラルンプールの中学生、北京の高校生)

サポーター:2名(TJF主催事業参加者)

実施形態:オフライン(LIFULL Table_東京都千代田区麹町1-4-4 1F)/オンライン(Zoom)

参加費:無

企画協力:特定非営利活動法人 ELP(Earth Literacy Program)

実施主体:TJF主催

(2)地球講座 The CORE 事業概要

対象:国内外の中高生

実施日:2024年11月30日(土)、12月8日(日)、12月21日(土)

参加人数:15名の中高生(東京1名、広島3名、大分1名、フィリピン・マニラ1名、マレーシア・サラワク州2名、韓国・京畿道3名、慶尚北道1名、中国・上海2名、北京1名)

講師:竹村眞一氏(特定非営利活動法人 ELP(Earth Literacy Program)代表、京都芸術大学教授)

ナビゲーター:高梨集氏(特定非営利活動法人 ELP(Earth Literacy Program))

サポーター:4名(TJF主催事業参加者)

逐次通訳者:9名(TJF主催事業参加者3名を含む)

実施形態:オンライン(Zoom)
参加費:無
企画協力:特定非営利活動法人 ELP (Earth Literacy Program)
実施主体:TJF 主催

事業名	アの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	1,752,000		1,154,563		597,437	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
	謝金	0	謝金	333,032	謝金	333,032
差額発生 の事由	慶應義塾大学が実施した令和6年度「教員養成機関等との連携による専門人財育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」の運営指導委員会が当初予定よりも多い回数開催されたことによる。また、大学から講義やコンテストの審査員を依頼されたことにより謝金が増額となった。					
事業概要						
アの事業に関連する学会、団体等への会費等支出に加え、会員のネットワークを活かした情報収集とTJF事業の広報を行った。具体的には、地球講座の広報として、関係者をお招きした懇親会の実施や、事業横断型の勉強会を設けた。また、職員の学ぶ機会として、外部セミナーへの参加や、内部の勉強会に向けての準備を実施した。						

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

【予算額 1,219,500 円／実績額 1,370,357 円／収支差額 △150,857 円】

事業名	ときめき取材記ウェブサイトの運営					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	849,500		1,283,131		△433,631	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
	講師謝金	0	講師謝金	15,000	講師謝金	15,000
差額発生 の事由	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブサイトの外部団体への移行費用が多く発生した。 ・ときめき取材記プロジェクト報告書に実践報告を1本追加したことで編集・DTP費用が発生した。 					
2024年度の事業						
＜事業の目的＞						
<p>学生が社会を多面的に見つめなおし、インタビューとじっくり向き合うことで、自分と異なる意見や考えを聞き、相手のことばを受け止め、自分が思い込んでいる「文化」を崩し、「文化」を新しい視点で捉えるようになること、またウェブサイトに記事を発信することで、表現力を身につけるとともに発信することの責任を感じてもらったことを「ときめき取材記」プロジェクトではねらいとしている。「ときめき取材記」ウェブサイトに記事を掲載することを、ときめき取材記プロジェクトのゴールとすることで、プロジェクトでのインタビューが課題のためではなく発信のためのインタビューとなる。またウェブサイトに掲載されている記事が、プロジェクトに取り組む人たちに有益な資料として活用されるとともに、報告書に掲載されている実践例が新たな参加教師に参照され、プロジェクトの実践者が増えることもウェブサイトの目的としている。</p>						
＜2024年度の目標＞						
<p>ときめき取材記プロジェクトが継続発展できるよう、ときめきプロジェクトに長年関わっている大学教師等が中心となり立ち上げた外部団体にウェブサイトの運営を移譲するために、団体の設立やウェブサイトの移行をサポートする。</p>						
＜実施内容＞						
<p>新団体「対話するインタビュー実践研究会(TAIWAS:タイワス)」*の設立に協力し、2025年3月末にときめき取材記プロジェクトおよびウェブサイトをTAIWASに移譲した。ウェブサイトの移行に際しては、掲載されているインタビューの方々へ運営者変更のお知らせを送り、不達となった方の記事は新しいウェブサイトでは非公開とした。</p>						

<p>また、ときめき取材記プロジェクト報告書に実践報告を1例加え、2025年増補版としてPDFをTJFのサイトに掲載した。同報告書には本プロジェクトの意義と実践報告10本が収録されている。</p> <p>*代表理事: 三代純平武蔵野美術大学教授、副代表理事: 義永美央子大阪大学教授ほか理事6名</p> <p>https://taiwas.jp/tokimeki/organization/</p>
<p><成果></p> <p>外部の新団体 TAIWAS に本プロジェクトおよびウェブサイトに移譲したことで、TJF が8年間積み上げてきたプロジェクトが継続できることになった。</p> <p>ときめき取材記ウェブサイトには、開始した2016年から2024年3月までに、約170本の記事が掲載され、400名を超える国内外の学生が取り組んだ。掲載に至らなかった記事も多数あることを考えると、実際に取り組んだ学生はこの数をはるかに上回る。学生は人と真剣に向き合い、語りに耳を傾け、対話を交わすことで、さまざまな気づきや学びを得たことが、記事の末尾に掲載されている感想から伝わってくる。ウェブサイトで発信するというゴールがあったことで、インタビュー活動がよりオーセンティックなものとなった。</p> <p>また、今年度初めての取り組みにもかかわらず、質の高い記事を何本も完成させウェブ掲載にいたったケースがいくつか出てきた。これは、この数年をかけて蓄積した資料(本プロジェクト報告書やワークシート、講座動画など)があったことが大きい。</p>
<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)></p> <p>今後、本プロジェクトは TAIWAS が行うことになるが、TJF が掲げていた方針に基づきながら、本プロジェクトが発展していくことを期待したい。</p>
<p>事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)</p> <p>■『〈対話〉をつくるインタビュー「ときめき取材記」プロジェクト報告書』2025年増補版 発行:2025年2月 判型:B5判、104ページ、PDF版をウェブサイトに掲載 https://www.tjf.or.jp/publication/others/</p> <p>■ときめき取材記ウェブサイトの TAIWAS への移譲:2025年3月</p>

事業名	イの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
経費(円)	予算額		執行額		差額	
	370,000		87,226		282,774	
収益(円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額事由						
事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)						
イの事業に関連する学会、団体等への会費等支出に加え、学会参加を含めネットワークを活かした情報収集とTJFの事業の広報を行った。						

ウ. 多様な言語や文化の背景をもつ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業
【予算額 8,830,000 円／実績額 10,511,465 円／収支差額 △1,681,465 円】

事業名	多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿（PCAMP）」 (1) ひろしま PCAMP2024、(2) とやま PCAMP、(3) とうきょう PCAMP					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	8,350,000		10,475,332		△2,125,332	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	100,000	参加費	197,000	参加費	97,000
	助成金	500,000	助成金	500,000	助成金	0
	寄付金	0	寄付金	50,000	寄付金	50,000
	謝金等	0	謝金等	20,308	謝金等	20,308
差額発生 の事由	<p>経費増については、年度当初の事業計画になかった「とうきょう PCAMP」を、東京および近郊地域のニーズ把握を分析することを目的として、小規模に実施したため。</p> <p>収益増については、とうきょう PCAMP を開催したことによる参加費増、十全化学株式会社等からのご寄付により増収となった。</p>					
2024 年度の事業						
＜事業の目的＞						
<p>多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」(PCAMP)は、多様なことばと文化につながりや興味・関心を持つ中高生及び中高生と同年齢の青少年を対象に実施している合宿型交流プログラムである。「一人ひとりの個性を尊重し、多様性に富み、創造性を育む社会環境の醸成」を目的とする。</p>						
＜2024 年度の目標＞						
<p>「多文化×芸術」をコンセプトに、「参加者が芸術表現活動を通して自他理解を深め、参加者間の多様性と内なる多様性に気づき、受け入れ、尊重しあい、協力・協働・共創のマインドが育つよう、次のことに重点をおいてプログラムを組んでいる。①ことばと身体で自分のアイデンティティを表現する。②多様な参加者と創造性を刺激しあい、自他理解を深める。③さまざまなバックグラウンドの違いを越えて対話し、協力・協働・共創を体験する。また、地域版 PCAMP では、①地域の多文化共生を担う次世代リーダーを育成すること、②地域において芸術文化に取り組む関係者と多文化共生に取り組む関係者、及び地域住民との協力・協働・共創も促し、地域づくりに貢献すること、③現地調達、現地消費により地域経済の活性化につなげること、などもめざしている。</p>						
(1)ひろしま PCAMP						
PCAMP 地域版の最初の対象地域である広島県において、「ひろしま PCAMP」を3か年かけて県内の安芸						

高田市(2022)、呉市(2023)、福山市(2024)での巡回開催を果たす。また、募集対象を広島県内から中・四国地域に拡大し、広島県を拠点に行政や諸団体がより主体的に PCAMP を運営していく体制(現地化)を構築することができるかについて見極める。

(2)とやま PCAMP

広島県に続いて 2 地域目である富山県において「とやま PCAMP」の初開催を実現させる。富山市から「オーバード・ホール」の管理を指定されている公益財団法人富山市民文化事業団及び富山市と共同主催し、主催者間の応分の費用分担、運営業務の分担を含め、現地主体の PCAMP 運営のスキームを作る。

(3)とうきょう PCAMP

年度当初の計画になく、東京での開催の可能性とニーズの把握を分析することを目的として、下半期の事業として新たに計画・実施した。PCAMP は全国版として 2017 年度の東京開催からスタートし、2 年度開催後コロナ禍により中断。2020 年度より 2 年間オンライン上で開催した後、地域版 PCAMP を広島県、そして富山県で展開したため、東京では 2019 年 3 月以来 6 年振りの再開となる。再開に当たっての目標は、東京も一つの地域と捉え、広島や富山で培った経験を活かしつつ、今後は日本最大の多文化都市であり、TJF の本拠地である東京と地方都市の両方で地域版 PCAMP を開催していくこと。また、PCAMP の原点に立ち戻り、外国につながる中高生がより多く参加できることを目指す。

<関連プログラム>

下半期を中心に、PCAMP の多地域化とその関連プログラムの多岐にわたる派生という現状を踏まえ、PCAMP ウェブとパンフレットの改訂を行う。

<実施内容>

(1)ひろしま PCAMP

6月に広島県福山市、呉市、岡山県笠岡市において、それぞれ外国につながる小学生、その受け入れ小学校の教員、ドラマ教育を推進する中学校の生徒、中・四国のアーティストや教育関係者等を対象とするプレ・ワークショップを実施した。8月に3泊4日の PCAMP を福山市で開催した。アメリカ、東京、広島在住のアーティストたちがファシリテーションと創作サポートを行った。合宿中に中高生年代の参加者が創作した「演劇、ダンス、歌、演奏、ジャグリング」からなるパフォーマンス作品を、合宿最終日に芸術ホール「リーデンローズ」で発表した。発表会は参加者の家族や市民など一般の方に公開した。PCAMP 終了後、現地協力者と共に廿日市市の行政関係者、地域活動関係者を訪問し、当該地域での PCAMP 開催の可能性について協議した。

(2)とやま PCAMP

2024年2月にそれぞれ留学生、市民、アーティストを対象とするプレ・ワークショップを行った。8月上旬に3泊4日の PCAMP を開催した。アメリカ、東京、富山在住のアーティストたちがファシリテーションと創作サポートを担当した。合宿中に中高生年代の参加者が創作した「演劇、ダンス・身体表現」からなるパフォーマンス作品を、合宿最終日に芸術ホール「オーバード・ホール」で発表した。発表会は参加者の家族や市民など一般の方に公開した。2025年2月「国際交流フィスティバル in TOYAMA」に出展し、2025年度開催予定の PCAMP と関連ワークショップについて広報した。

(3)とうきょう PCAMP

2024年12月に開かれた ESD 推進ネットワーク全国フォーラム 2024 にてポスター発表を行い、とうきょう PCAMP の開催について広報した。2025年3月に3泊4日の PCAMP を東京都八王子市で開催し、東京

在住のアーティストたちがファシリテーションと創作サポートを担当した。合宿中に中高生年代の参加者が創作した「演劇、ダンス・身体表現」からなるパフォーマンス作品を、合宿最終日に発表した。発表会は参加者の家族や市民など一般の方に公開した。

<関連プログラム>

PCAMPの地域的広がり、運営に関わるアーティストの人数の拡大、関連ワークショップの多角的展開に伴い、「多文化×芸術」をコンセプトとする事業全体の再編成計画を策定。それに合わせてPCAMPウェブサイトの改訂に取り組んだ(2025年4月中旬にリニューアルオープン)。とうきょうPCAMPの開催を優先し、PCAMPパンフレットの作成は2025年度に延期し、「多文化×芸術」ネットワーク(T-ART ネット)の新規立ち上げ後に実施予定。

<成果>

(1)ひろしま PCAMP

これまでの現地協力者のリクエストにより、外国ルーツの子どもを多く受け入れている学校や地域団体のニーズに対応し、TJF側からも積極的に働きかけたことにより、アウトリーチワークショップが初めて実現した。ファシリテーターの育成を目的とするティーチング・アーティスト(TA)研修の受講者のリクエストにより、演劇教育を行う中学校へのアウトリーチワークショップが実現し、複数の受講者のPCAMP応募につながった。参加地域も広島、岡山、愛媛へと広がった。運営面では、現地のまちづくり登録団体に運営サポートを委託することができたほか、映像や写真記録者、広報資料デザイナーなど現地の人材を活用することができた。そして、はじめてムスリムの参加者の受け入れにあたり、地域の多文化サポート団体やムスリムコミュニティ支援者と密な連携が取れた。一方、発達障害のある参加者については、在籍校の教員、保護者のバックアップが得られ、運営側として多様な参加者を包摂するための知見を得る機会となった。また、地場産業であるテキスタイル業者の協賛とボランティアを得て発表会用の舞台衣装を作ることができた。

(2)とやま PCAMP

富山県のみならず、隣の石川県からの参加があった。また、現地企業から使途特定寄付金が得られ、それを原資として令和6年能登半島地震の被災者特別参加枠を設けることができた。運営面では、共同主催団体である公益財団法人富山市民文化事業団と協働で企画、広報、事前準備、本番の運営に取り組んだ。演劇とダンスが中心のPCAMPにはじめて現地の音楽家による生演奏が加わり、参加者が自己表現するための場づくりに、幅とバリエーションが増えた。

(3)とうきょう PCAMP

広島や富山のPCAMPで用いてきたI am from(自分の経験や思い出をポエムに書き起こし、演劇作品を立ち上げる手法)ではなく、参加者が絵を描いて演劇作品を立ち上げる手法を採用した。テーマは、「私の思い出」として、三つの問い①私のターニングポイント、②忘れられない大切な人・もの、③小さいころの忘れられない景色について、参加者一人ひとりが考え、自由に絵を描いた。また、発表会もホールの舞台ではなく、観客と同じ目線と至近距離で行った。劇場型ではない発表会というゴールに向けた創作と演出、制作の知見を得ることができた。今回は帰国子女を含め外国につながりを持つ中高生年代が参加者の大部分を占め、多言語・多文化交流色がより鮮明であった。

<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)>

(1)ひろしま PCAMP

広島での三年間の事業実施を通して、現地の関係団体による主体的な運営体制を構築することで地域主体の持続可能な事業運営を目指したが、現地との協議の結果その実現には様々な課題があることが分かった。関係団体の担い手の高齢化に伴う世代交代の課題を抱えていること、活動資金が十分ではないことなどが理由として挙げられる。そのため、当該地域で PCAMP を継続開催するには運営体制と経費の両方において TJF 主導で行うことが求められ、今後 PCAMP 事業の多地域展開を目指す TJF としては、3 年間をもって「ひろしま PCAMP」を一旦収束させることにした。今後は当該地域の関係団体、アーティストとのネットワークを保ちながら、個別のニーズに対応していく形に切り替える。

(2)とやま PCAMP

2024 年度は初回ということもあって、当該地域に外国につながる中高生年代が多く暮らしているながら PCAMP への応募が少なかった。該当者層がより多く応募するために、日本語・学習支援教室や公共の居場所へのアウトリーチ型ワークショップ、公募型ワークショップを実施し、体験の機会を増やす。

(3)とうきょう PCAMP

地域版として再スタートを切った今年度は少人数での開催であったが、2025 年度は定員を他地域の会場と同じ規模(25 名程度)にする。引き続き外国につながる中高生年代を中心に募集しつつ、外国につながる中高年代と交流したいと考える同世代の子どもたちが垣根なく参加してくれることを目指す。

その他の特記事項

2024 年度はとやま PCAMP、ひろしま PCAMP にそれぞれ韓国仁川外国語学校の日本語履修生を 2 名ずつ受け入れた。UNESCO Korean National Commission の関係者が PCAMP に大きな関心を示し、韓国の高校生にも参加の機会を与えてほしいという要望が寄せられていた。初めて開催する富山の会場において外国につながる中高生年代の募集に苦戦していたこともあり、多文化、多様性の担保という観点、そして以前 PCAMP のオンライン版で海外の日本語学習者を受け入れた経験から、対面式の地域版 PCAMP にも海外の日本語学習者を受け入れてみることにした。この招聘によりダイナミックな交流ができたが、運営人員に限られるなか、受入れ業務、サポート体制などは大きな負担となった。

事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)

(1)ひろしま PCAMP

・対象:開催地及び周辺地域の外国につながる中高生年代(14~19 歳)と外国につながる中高生年代と交流したい同世代

・実施日:2024 年 8 月 19 日(月)~22 日(木)

・会場:ふくやま芸術文化ホール リーデンローズ(広島県福山市)

・ファシリテーター:

柏木俊彦氏(メイン・ファシリテーター/演出家・舞台俳優)

田畑真希氏(メイン・ファシリテーター/ダンサー・振付家)

森永明日夏氏(メイン・ファシリテーター/舞台俳優・ティーチング・アーティスト)

坂田光平氏(サブ・ファシリテーター/俳優)

江島慶俊氏(サブ・ファシリテーター/俳優・劇作家)

- ・参加者数:広島県、岡山県、愛媛県、韓国仁川広域市在住の中高生等 22 名
 - *内訳:中学生 9 名、高校生 10 名、日本語支援教室 1 名、大学生 2 名(サポーター)／つながりの国・地域はインドネシア、韓国、中国、日本、ブラジルなど
 - ・主催:TJF
 - ・後援:福山市、広島県教育委員会
 - ・協力:NPO 安芸高田市国際交流協会、NPO 法人フリースクール木のねっこ(廿日市市)、一般社団法人 Weave(福山市)、一般社団法人舞台芸術制作室無色透明(広島市)、呉市国際交流協会、公益財団法人しまね国際センター、公益財団法人東広島市教育文化振興事業団、こどものひろばヤッチャル(東広島市)、廿日市市国際交流協会、久田総合教育研究所(福山市)、ひまわり 21(呉市)、びんご日本語多言語サポートセンター「びるど」(福山市)、ふくやま国際交流協会、福山市まちづくりサポートセンター、リーディング・ファクトリー(福山市)、ワールド・キッズ・ネットワーク(呉市)
 - ・衣装協力:篠原テキスタイル株式会社
- ※その他、PCAMP に先立って広島(福山市、呉市)、岡山(笠岡市)で行った計 4 つの体験ワークショップには、小学生、中学生、教員、芸術関係者計 113 名が参加した。

(2)とやま PCAMP

- ・対象:開催地及び周辺地域の外国につながる中高生年代(14～19 歳)と外国につながる中高生年代と交流したい同世代
- ・実施日:2024 年 8 月 8 日(木)～11 日(日)
- ・会場:富山市民芸術創造センター、オーバード・ホール 中ホール(富山県富山市)
- ・ファシリテーター:
 - 柏木俊彦氏(メイン・ファシリテーター／演出家・舞台俳優)
 - 田畑真希氏(メイン・ファシリテーター／ダンサー・振付家)
 - 森永明日夏氏(メイン・ファシリテーター／舞台俳優・ティーチング・アーティスト)
 - 木本千晴氏(サブ・ファシリテーター／俳優)
 - 長谷川万葉氏(サブ・ファシリテーター／舞台俳優、専門学校教員)
 - ヤマダベン氏(音楽／パーカッショニスト)
- ・参加者数:富山県、石川県、韓国仁川広域市在住の中高生等 22 名
- *内訳:中学生 9 名、高校生 12 名、専門学校生 1 名／つながりの国・地域:ウクライナ、韓国、日本など
- ・主催:公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)、公益財団法人富山市民文化事業団(オーバード・ホール)、富山市
- ・共催:北日本新聞社
- ・後援:富山県教育委員会、公益財団法人とやま国際センター、富山市民国際交流協会
- ・協力:NGO ダイバーシティとやま、NPO 法人アレッセ高岡、NPO 法人富山国際学院、射水多文化子どもサポートセンター、劇・あそび・表現活動 Ten Seeds、公益財団法人黒部市国際文化センター、富山県障害者芸術活動普及支援センターぱーと◎とやま、南砺市友好交流協会
- ・助成:公益財団法人三菱 UFJ 国際財団
- ・寄付:十全化学株式会社

(3)とうきょう PCAMP

・対象:開催地及び周辺地域の外国につながる中高生年代(14~19歳)と外国につながる中高生年代と交流したい同世代

・実施日:2025年3月27日(木)~30日(日)

・会場:公益財団法人大学セミナーハウス 中央セミナー室(東京都八王子市)

・ファシリテーター:

柏木俊彦氏(メイン・ファシリテーター/演出家・舞台俳優)

田畑真希氏(メイン・ファシリテーター/ダンサー・振付家)

深堀絵梨氏(サブ・ファシリテーター/演出家、振付家、ダンサー、俳優)

小山晶嗣氏(サブ・ファシリテーター/ダンサー)

・参加者数:神奈川、東京、栃木、長野、広島、山梨在住の中高生等14名

※内訳:中学生8名、高校生6名/つながりの国・地域:アメリカ、イギリス、オーストラリア、韓国、タイ、中国、日本、ブラジル、フィリピン、ペルーなど

・主催:TJF

・後援:東京都八王子市

事業名	ウの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
経費(円)	予算額		執行額		差額	
	480,000		36,133		443,867	
収益(円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額事由						
事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)						
ウの事業に関連する外部ネットワークとのつながりを活かした情報収集とTJF事業の広報を行った。						

工. 広報事業

【予算額 6,643,331 円／実績額 5,212,317 円／収支差額 1,431,014 円】

事業名	財団事業等発信					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	4,250,709		3,161,177		1,089,532	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額発生 の事由	ウェブサイトの既存コンテンツの調査を行い、コンテンツ整理の方向性を見極めるため、ウェブサイト制作アプリケーション (WordPress) の最新版へのアップグレードおよびウェブサイトの改修を次年度以降に行うことにした。					
2024 年度の事業						
＜事業の目的＞						
TJF の活動趣旨および各事業についての情報が対象とする人たちに届くよう、情報発信と環境整備を行う。						
＜2024 年度の目標＞						
<ul style="list-style-type: none"> ・TJF の活動趣旨と各事業について、ウェブサイト、メルマガ、SNS 等を通じた情報発信を継続する。 ・ウェブサイトの利便性の向上をめざし、環境整備を行う。また制作年度の古いウェブサイト・ページやデータ、機能の整理を行う。あわせて、今後、ウェブサイトの保守および新規機能・ページ等の追加の両方をよりスムーズに進められるよう、保守管理・制作を委託する業者の一本化を検討する。 ・2023 度に発行できなかった『CoReCa2022-2023』を印刷、送付する。 						
＜実施内容＞						
<ul style="list-style-type: none"> ・メルマガ「わやわや」の定期号と、各事業のニーズに対応した適宜臨時号を配信した。 ・『CoReCa2022-2023』を印刷、送付した。 ・WordPress 関連ファイル等のバージョンアップを行った。 						
＜成果＞						
<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブサイト、メールマガジン「わやわや」、各種 SNS を通じ、TJF の活動趣旨と各事業について情報発信を行った。 ・ウェブサイトの改修やウェブの管理のさらなる利便化に向けて、専門業者との打ち合わせを進め、2025 年度に具体的な作業を行える見通しがたった。 						

<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サーバーの空き容量が逼迫するなどの問題が発生したため、保守管理の内容を見直す。 ・2025 年度も引き続きウェブコンテンツの整理、WordPress のバージョンアップ等を行い、保守管理・制作を委託する業者の一本化を図る。
<p>事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 『CoReCa2022-2023』 発行:2024 年 5 月 仕様:A4 判変型、カラー、46 ページ 部数:5,000 部 ■ メルマガ「わやわや」 登録者数:2,187 毎月第 2 水曜日定期号および臨時号 18 本を配信

事業名	デジタル媒体を使った広報のサポート					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	2,112,622		2,036,531		76,091	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額発生 の事由						
2024 年度の事業						
<事業の目的>						
デジタル媒体を使用した情報発信や事業運営が円滑に行われるよう、IT 機器管理や各種アプリケーションの利用など環境整備やテクニカル面でのサポートを行う。						
<実施内容>						
デジタル媒体を使用した情報発信や事業運営が円滑に行われるよう、IT 器機管理や各種アプリケーションの利用など環境整備やテクニカル面でのサポートを行った。						

事業名	工の事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	280,000		14,609		265,391	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額発生 の事由						
事業概要(対象、実施日、講師等、参加者数、主催・共催・後援・協力・助成等)						
エの事業に関連する外部ネットワークとのつながりを活かした情報収集と事業の広報を行った。						

オ. 公募助成金プログラム

【予算額 335,030 円／実績額 31,085 円／収支差額 303,945 円】

事業名	公募助成金プログラム					
経費 (円)	予算額		執行額		差額	
	335,030		31,085		303,945	
収益 (円)	予算額		入金額		差額	
	参加費	0	参加費	0	参加費	0
	助成金	0	助成金	0	助成金	0
差額発生 の事由	事業全体の見直しが必要となり、助成を次年度に見送ったため。					
2024 年度の事業						
<事業の目的>						
TJF とめざす方向を同じくする他団体に助成する事業を実施し、自主事業の実施以外の形式で、直接かつ間接的に TJF の事業目標の達成を目指す。						
<2024 年度の目標>						
公募を開始するべく、公募助成事業の骨格と審査の体制を固める。						
<実施内容>						
公募助成事業のこれまでの資料を精査し、見直すべきポイントを明確にした。TJF のビジョン・ミッションと現在進めている事業の再構築の方向性を踏まえて、それらが反映されるような枠組み作りを目指した。						
<成果>						
2021 年度から 2023 年度まで準備してきた資料を精査し、その間新たに策定された TJF ビジョン・ミッションに関する記述を反映させた。更にビジョン・ミッションの目指すところに沿うよう調整した。概要全体の調整に着手し、2025 年度の公募開始に向けた準備を多方面で整えた。						
<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)>						
2025 年度は、第 1 回となる公募に向けて最終調整をし、助成団体を確定する(助成金支出は次年度)。TJF のビジョン・ミッションと今後の事業の方向性を踏まえた助成事業が実施できるよう、審査ポイントや審査員の構成を検討・確定する。						